

# 三浦栲良の連句資料について

寺島 徹

## 一 栲良の連句資料——逸漁関係をもとに——

伊勢の中興期俳人、三浦栲良（一七二九—一七八〇）の未紹介の連句作品を紹介し、翻刻したい。

栲良の連句に関する研究は注釈をのぞけばほとんどみられない。だが、はやく満田達夫氏「蕪村と暁台—その連句作法をめぐって」（『連歌俳諧研究』66号、昭和59年1月）において、暁台、蕪村とともに栲良についても多くの資料がひかれ、式目を中心に連句手法の分析がなされている。

本稿では、右の論考で採り上げられていない栲良と逸漁の連句資料（天理大学附属天理図書館所蔵）を紹介し、翻刻することとする。翻刻する資料は、次の通りである。<sup>1)</sup>

○『月次俳諧』明和八—九年』（天理図書館綿屋文庫蔵逸漁文庫

俳諧資料集わ九九四・五〇・三・五）

- ① 「思ひきや」の巻 歌仙 (明和八年)
- ② 「古今留別」の巻 九句 (明和八年)
- ③ 「友を得て」の巻 歌仙 (明和八年)

(図参照)

○『月次俳諧』竹 安永七—安永九年』（同 逸漁文庫俳諧資料集

- ④ 「故郷や」の巻 歌仙 (安永七年)
- ⑤ 「紅梅に」の巻 歌仙 (安永七年)
- ⑥ 「梅がゝに」の巻 歌仙 (安永七年)
- ⑦ 「旅人の」の巻 半歌仙 (安永七年)
- ⑧ 「はいかるや」の巻 歌仙 (安永七年)
- ⑨ 「風の日や」の巻 歌仙 (安永七年)
- ⑩ 「かすむ日や」の巻 五十韻 (安永七年)
- ⑪ 「雨降らば」の巻 半歌仙 (安永九年)

わ九九四・五〇・三・七)

なお、翻刻する連句資料を収める俳書の書誌事項についても、簡略に記しておきたい。

○『月次俳諧』明和八—九年』

半紙本一冊（縦二二・八糎×横一六・二糎）。表紙無地水浅葱色。題箋中央「全」（墨）。墨付三二丁。逸漁筆。内容は、明和八年から九年にわたる逸漁の句日記的な発句、連句の句稿書留であり、栲良、暁台一派との交流も書留められる。

○『月次俳諧』竹 安永七—安永九年』

半紙本一冊（縦二二・九糎×横一六・五糎）。表紙無地水浅葱色。中央題箋「竹」（朱）。墨付七八丁。逸漁筆か。内容は、安永七年か

ら九年にわたる逸漁一派の発句、連句等の清書書留であり、樗良、晧台一派との交流も記録される。

## 二 樗良と逸漁の交流

まず、辻村逸漁の略歴について簡単に記しておこう。<sup>②</sup>

逸漁は、寛保元年（一七四一）に伊勢の地に生まれる。諱は保順、通称を代々藤兵衛という。号を一斗庵。河崎南町に住み、大阪屋という運送問屋を営んだ。可都里「名録帳」（池原鍊昌氏『俳文芸』34）に「米屋逸漁／川崎／辻村藤兵衛」とある。晧台、樗良・士朗らを師友とし、太古廬庵を率いた。千代女とも交流があったという（岩出説）。樗良を介して蕪村との風交もあったか。寛政九年十二月十一日没（五十七歳）。

逸漁と樗良の交流についても、翻刻する資料を中心に、概略を記しておきたい。<sup>④</sup>その交流の開始は、記録に残っているもので、宝暦九年（二七五九）の冬に、樗良から点を受けているのが最初である。逸漁文庫一・八九」その後、宝暦年間、しばらく、樗良の批点をうけることが続く。宝暦十一年十二月二十五日、逸漁宛樗良書簡に、樗良が伊勢河崎で不埒を働いたため、南紀に逃亡したことが記され、逸漁が助力を求めている。<sup>⑤</sup>この時期から、樗良、逸漁の交流を支えるものとして、のちに晧台門弟となる岩間東壺の存在があった。<sup>⑥</sup>

宝暦十三年夏、冬に樗良から点をうけているのを最後に、明和初期から明和六年は記録が途絶えている。明和七年の春には、『初懐紙』（樗良編）に月花園連として逸漁は南河らとともに入集し、明和七年秋に、ふたたび樗良評、発句巻の記録がみられるようになる。

明和八年には、越中の陸史をまじえて樗良の無為庵一派との交流がみられる。本稿で翻刻する連句資料を含む、明和八年から安永九年

（樗良没年）までの樗良と逸漁一派との交流を拙稿「辻村逸漁年譜稿上」から抄出して記してみたい。

## 明和八年（一七七二）辛卯

○二月二十日過、越中の風人陸史、木五兩人無為庵へ来訪。樗良より連絡があるが、逸漁は風邪で参会せず。「三・五」

○三月二日、陸史、木吾が麻吉に会ふ。「みよしの、花にと心ざす越の陸史、木吾の両雅に対し」て、逸漁、「花をたどる魂酒をひたすべし」と詠む。「三・五」

○同二日、陸史、木吾が五白に誘われ、伊勢の樗良たちにも会う。陸史・坡仄・樗良・聞詩・木吾・宗居・蘿父・袋布・逸漁・南河ら十吟歌仙を巻く。「三・五」

○同三日、無為庵に逗留のよしを聞いて一陶を送る。「二・五」

○同三日、蛸口の二階にて節句に酒を飲み、逸漁「かく越の水をこたてや桃の宴」と発句を詠む。「三・五」

○六月中旬、樗良、宗居、越へおもむくにあたり離別吟を贈る。この時西川屋にて留別俳諧。坡仄・宗居・樗良・蘿父・呉湖・逸漁らの九句あり。「三・五」

○五月三日、越後の風人吹波・燕々来臨。宝珠院に会う。南河・吹波・燕々・樗良・楚竹・宗居・逸漁・滄洲・幾望・随雨・蘿父・南河ら十二吟歌仙。「三・五」

○同年『陽春吟』（樗良編）に川崎連として、逸漁、南河らとともに発句入集。

## 安永二年（一七七三）癸巳

○二月十五日、逸漁宛の東壺書簡（安永二年推定）に、花紅の暮雨巷滞在、龍石の伊勢滞在について触れたついでに、樗良の尾張来訪をめぐり、「空囊之御助二相成候ほど連中数も御座無く」と、断りの

伝言を頼んでいる。「二・七七」

安永三年（一七七四）甲午

○三月、栲良版行の「上巳」の刷物に、逸漁・南河らが載る（巻軸、栲良）。

安永四年（一七七五）乙未

○一月二十一日、滄洲ら宛丈芝書簡「二・一五七」および花紅宛丈芝書簡「二・一四五」は、同年逸漁たちと交流した丈芝坊白居が安永三年八月十六日に仙台に着いた旨を知らせるもの。丈芝は送別摺物を無事受け取った旨も記し、新しい一派を発足させたことを告げ、栲良への伝言も頼む。丈芝と栲良の仲をうかがうことができる。

安永五（一七七六）丙申

○一月、栲良評、発句合の書抜あり。「三・六」

○栲良編『月の夜』に逸漁、発句一。

安永六年（一七七七）丁酉

○三月、『花七日』（栲良編）に逸漁「大寺も小寺も花の盛りかな」入集。「三・六」

安永七（一七七八）戊戌

○二月十三日、京の無為庵（栲良）入来。「幾とせかへだゝりて逸漁子の野に遊ぶ」として、栲良・逸漁・洒高・楚竹・秋江・袋布ら六吟歌仙。

○同十三日、探題発句。栲良、逸漁の発句あり。

○同十四日、越坂祥永寺にて興行。栲良・素濤・素平・洒高・塘草・丘高・嵐州・逸漁ら八吟歌仙。

○同十五日、中寺町長行院興行。栲良・蘿父・免湖・其龍・其白・青溪・茂松・其外・逸漁・夜光ら十吟半歌仙。

○同十五日夜、興行。「年を経て無為庵に対す」として、逸漁・栲良・洒高・袋布・滄洲・南河ら六吟歌仙あり。

○同十六日夜、清火屋宗七亭にて南河興行。栲良・南河・滄洲・逸漁・洒高・蘿父ら六吟歌仙。

○同十七日、村松藤太夫興行。栲良・素濤・逸漁・洒高・素平・蘿父・丘高ら七吟歌仙。

○同十九日、世義寺法楽舎興行（秋江饗応）。栲良・秋江・南河・袋布・逸漁・洒高・滄洲・紫蘭・楚竹・蘿父・素濤ら十一吟五十韻。

当座探題（逸漁、栲良ら）。「以上、三・七」

安永九年（一七八〇）庚子

○八月十五日、越後十日市の桃路、無為庵へ入来、船にてもてなす。桃路十日市・逸漁・栲良・桂舟・楚竹ら五吟半歌仙。

○栲良吟「見るうちに海にやどりけりけふの月」を逸漁、句帳に記録する。「三・七」

○十一月十六日、栲良、坡仄の梅月別荘にて没す。享年五十二歳（『雪手向』）。逸漁、無為庵栲良に追悼文を手向ける。「世を旅に古郷の雪ときえ、いる歎、逸漁」。「三・七」

明和八年と安永七年が華々しい。安永初から安永中頃にかけては、蕪村との交流を中心に栲良の在京が多くなるときであり、年譜からもうかがえるように、逸漁との伊勢での表だった俳諧交流は少なくなる。ただ、断続的に、栲良による逸漁への批点がみられ、また、書簡を通じた発句のやりとりも行われていたようだ。安永九年には、栲良追善として、逸漁・洒高・袋布・滄洲・南河・秋江らが六吟歌仙を巻いている。天明二（一七八二）には、栲良三回忌追善五・一を行っている。寛政八年（一七九六）十一月には、同門の俳士と協力して、河崎南町宝珠院境内に無為庵栲良の碑を建立している。同十二月、栲良追善文には「我郷の俳諧麦林叟没後、梅路・季覧いたりて盛に流行して遺風を残す。中頃何声出て一風変化して、のち風流混雜逗也。時に無

為庵『白髮鴉』集を撰て、始而翁の正風を示されしより、世上俳諧の衿を直す事盛に成ぬ。予もとより師友の交深、その流をつたへて「六・一〇」と記す。逸漁の同郷、樗良への敬慕の念が認められる。

さて、今回紹介する樗良と逸漁の連句作品について少々、式目の観点から確認しておこう。さきに引用した満田氏の論考で、樗良が初折の月の出所とちよをあまり意識していないこと、表の述懐句について厭われないことを分析され、樗良が地方系蕉門と一線を画していることも指摘されている。逸漁と巻いた半歌仙、歌仙形式のものは、九巻ある。前稿でみた暁台と逸漁が一座する歌仙は、初裏の月の出所は七句目を守ることが多かった。<sup>(8)</sup> 樗良と逸漁一派の場合、対照的で七句目に月が出ているのは、わずかに一卷<sup>(7)</sup>のみであり、多くは定まっていな<sup>(9)</sup>い。つまり、出所としての意識が希薄なのである。これは、とくに、逸漁一派という同じ連中を対象にしていることを考慮すれば、満田説を強く補強するものであろう。表の述懐という点でも①の脇に、「命」という本来、表に使わない語を使用しており（西行歌を典拠とする）、樗良ら無為庵一派の傾向を表しているのではないだろうか。もちろん、今後、式目全体を通した検証が必要ではあるが、逸漁一派という同じ連衆を相手に巻いた連句において、暁台と樗良の志向性の違いの一端が如実に示されている点は認めてよいであろう。そのような意味においても、今回翻刻する明和八年と安永七年における逸漁と樗良の連句交流は、看過できないものと考えられる。

なお、翻刻にあたり、句の清濁については原典を尊重する（前書において、句読点を適宜補った）。仮名遣いは原典のままとし、旧字体は新字体に改め、異体字は基本的に現行の字体に改めた。改行は「」で示す。

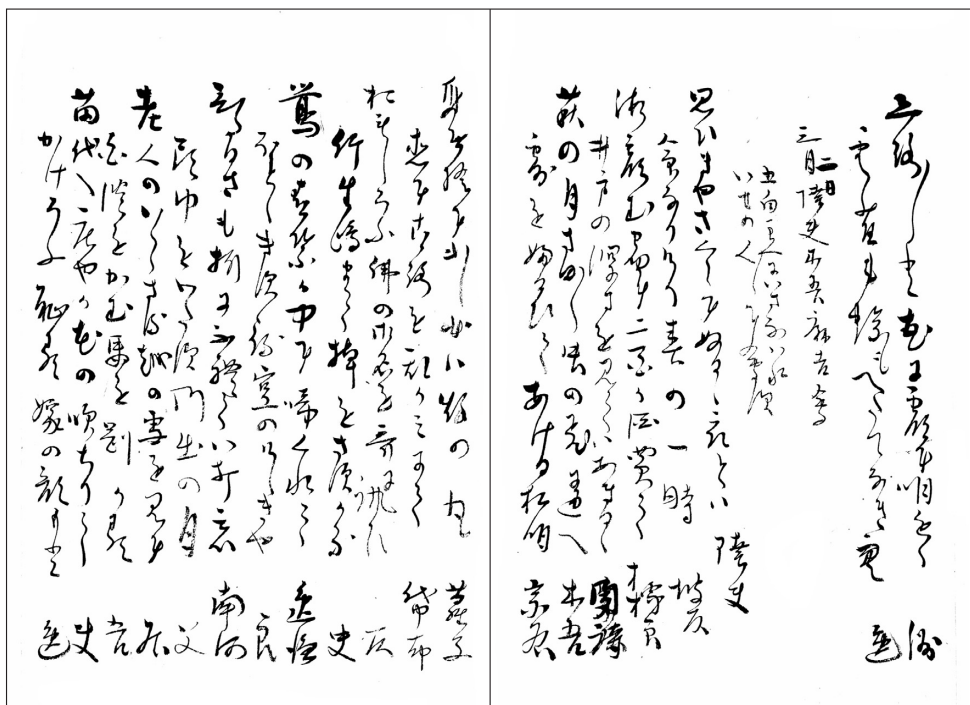


図 『月次俳諧』明和八-九年』（天理図書館蔵）①「思ひきや」の巻

三 翻刻

① 「思ひきや」の巻 歌仙 (明和八年) (わ九九四・五〇・三・五)

三月二日陸史木吾麻吉会

(図参照)

五白主人にいさなハれいせの人くに会す

思ひきやさくらにぬる衣とハ

命なりけり春の一時

海霞む宿に二百か酒買て

井戸の深さを見てハあきる、

萩の月さまへ虫の飛違へ

露をふるひてあける松明

身を捨に出し女ハ秋の風

恋にころを乱かみにて

おもしろふ仏の御名を哥に諷ひ

竹生嶋まで棹をさすかな

鶯の青葉か中に啼くれて

ほととぎす待空のけしきや

ひたるさも折にふれてハ打忘

頭巾をわたす門出の月

老人のいらさる越の雪を見に

白淡をかむ馬を剛かる

苗代へ庄やか花の吹ちりて

かけろふ恥る嫁の顔もと

聾とのハ壬生の猿とそなられる

東寺の大工けふハ休ミて

五月雨のしはらく晴る八下り

詩

良

河

逸

史

吾

居

父

南河

良

逸漁

史

仄

袋布

蘿父

宗居

木吾

聞詩

栲良

坡仄

陸史

坡仄

羽吹もおもく鴻の飛行  
米はこふ人のつとひし水車  
呵られ廻る膝行かなしき

明州に狐の会をはしめつゝ

障脳に灯のとほり安さよ

海中に家の宝を失ひて

天窓剃ふもかみそりハなし

更る夜の月に市朝の気をはなれ

泣はかりなる秋の声する

谷川の紅葉が中に銚をときて

母の敵にしふ身のほと

雲と過雨と鳴海の里の夜ハ

粟餅喰て春を待也

花に見る大黒棚のみしめ縄

七種はやす宵のとほし火

仄

居

逸

父

逸

良

仄

河

逸

居

史

逸

河

父

布

② 「古今留別」の巻 九句 (明和八年) (わ九九四・五〇・三・五)

此時西川屋にて「留別之俳諧

古今離別扇さく思ひ替らしな

坡仄か家に越の涼しさ

雨あかり草の上行宵の月

稲喰あらしさはく雁かね

火を焚て船人呵る秋寒ミ

包丁かつてたはこ切也

起ゝに酒を吞ねハ拍子なく

富士につくりし雪におとなく

忍ふ間を煙と消ェん身の行衛

逸漁

居

呉湖

良

蘿父

樗良

宗居

坡仄

坡仄



此すへ深更にて止ム

③「友を得て」の巻 歌仙 (明和八年) (わ九九四・五〇・三・五)

同五月三日 越後風人吹波燕々両子来臨

宝珠院にて会

友を得て短夜かこつ身となりぬ

膝をくつして杜宇きく

雨の日に流れ次第の苦小舟

軍なかはに和哥を詠るゝ

名月の近く都の恋しきや

芋を茶の子の茶やに休らひ

菊の葉にむし歯病児をましないて

暮てあたふた灯す御明

ふつゝかに軒より鳩の啼出し

しのふ男の妻を待わひ

度々に帯の結びを作り替へ

絹くはりとてさゝめきにけり

幾夜寐て又来る春を待ぬらん

馴てハ須磨の波音もよき

石仏無言の行にさし向かひ

粉糠を喰ふて居りて死れす

月に藤花にこゝろの狂ハしく

蝶をあるしの艸枕する

弥生かけていそかぬ旅の二人連

京より味噌の喰能かりける

猿沢の池をなかに客連て

伐残したる四五本の竹

南河 吹波 燕々 樗良 楚竹 宗居 逸漁 滄洲 幾望 塘雨 蘿父 南河 波 燕 逸 良 洲 望 雨 波 良 河

しはしつゝ積りて落る風の雪

船の出際を呼ふ人ノ声

鏈待かもちたる鏈に月更て

秋にも染す杉たてる門

順番に替りて戻る山田守

馴たる犬の先へかけ出し

盛りなる夜の牡丹に君待は

丁子の風炉の煙きえつゝ

千両の小判の極印打しまひ

息子にきける白骨の段

霜ふりて宵より寒き霜月に

何の家もみな馬を引出す

散花のねきを筏の流れ来て

風曇りせし春の明方

居 逸 良 居 望 逸 波 良 雨 居 燕 良 逸 居 父

④「故郷や」の巻 歌仙 (安永七年) (わ九九四・五〇・三・七)

二月十三日京無為庵人来

幾とせかへだゝりて」逸漁子の野に遊ぶ

故郷や梅に柳に人の顔

鶯もなけ得かたきハ時

盃に春の雨間しつかにて

とふして見ても狭家の不自由

横窓に月影くらく更わたり

駕舁戻す夜の秋風

脇さしの露を羽織におし拭ひ

猿に逢たる咄しする也

うつかりと拍子の抜き女中達

樗良 逸漁 酒高 楚竹 秋江 袋布 漁 良 布

蓮のさかりも見ず涼ミ居る  
夕立の音のみ雲ハ晴て行

摩耶の麓に出る釣ふね

よごれたる着物うるさく薄着して

恋しき人の声にかくる、

朝風呂の櫛かられしも思ひ草

いつか這出し桶の泥亀

雨晴て月ハ朧に花ハちり

御影供詣の連をまち居

剃髪をして此春の目のうとく

猫をもらふて茶漬振廻ふ

風立て古もの店のちり埃リ

冬そさひしき奈良の三条

菰くれて瘡かき乞食いたハリぬ

網煮る人の朝の賑ひ

粒銭の負数の推をかけにして

おさかりをまつ御所の玄関

薬玉を薫らす酒の長しつゝ

寐たる座頭をみなおかしかる

川岸に敷もの畳ふねの月

下り居る雁のはらくと立

閑越えて奥と名の付秋の興

琵琶を背負て石に腰かけ

もの思ふ甘娘のほそり哉

さかりの男色に迷ひし

暮かけて貴賤群つゝ花の中

たはるゝ蝶とちきる春風

高 江 竹 良 高 漁 布 高 良 竹 高 漁 江 高 良 布 漁 良 布 江 高 漁 良 竹 江

⑤ 「紅梅」の巻 歌仙 (安永七年) (わ九九四・五〇・三・七)

二月十四日越坂祥永寺にて興行

前書略

紅梅に霞見初る軒端かな

春めつらしき古郷の庵

一軒の青のりあふる火を焚て

月夜の舟の汐かしらまつ

人声の帰らう聞ゆ秋の風

牛を逃せし霧雨の中

焼後トを寺の田地の作りとり

薪て囲ひし湯屋の裏道

相図して娘呼出す星あかり

身ハ恋ころも黒羽織着て

遊山ふねとり乗際のさはつきて

桶の鯀を打こほしけり

昼寐して起せとおきぬ男衆

牡丹の雨をしのく傘

真直クに見るれと違ふ町のすし

氏子きほひて宮の木を曳

月花にうこかぬ御代の酒の酔

楼に飛入る蝶々を打

長キ日を笑ハぬ君に興さめて

何を思ひの橋こゆるらむ

ほとゝきす血に啼頃の五月雨

寝さめにすゝる粥のつめたき

いつの間に双六打ハ帰られし

余所ハ節季のつけとゝけする

良 高 漁 布 高 良 竹 高 漁 江 高 良 布 漁 良 布 江 高 漁 良 竹 江 高 漁 良 竹 江

降つみてなをおもしろき竹の雪

仏の膝に鶯の飛

陽炎に名を埋ミたる土細工

奈良にて花を見るも三年

桐の木に背戸口くらき宵の月

はたのたはこを盗るゝ也

やふ入の姉珍らしく敬ひて

表して開る黒ぬりの箱

近衛様に万葉の和歌書れたり

死れた僧を武蔵野に焼ク

日の曇り放レ鳥の声かれて

庭の蘇鉄に見ゆるこからし

高

良

漁

艸

良

高

漁

平

良

良

平

涛

⑥ 「梅がゝに」の巻 歌仙 (安永七年) (わ九九四・五〇・三・七)

二月十五日夜興行 年を経て無為庵に」対す

梅かゝに故人と呼も又おかし

錦の袖を払ふ春風

うす霞野原に駒を歩せて

山つなみせし跡の渺々

家二軒餅と酒売宵の月

船うた望む秋の夜の興

しよんほりと土佐の女郎の拾着て

眉のほそりに松風そ吹

うき恋の身ハかたを浪よるへなく

粒胡椒うる初瀬の坂中

鶯の声にこぼるゝ栗の花

昼ともしれず雨気つく空

逸漁

樗良

酒高

袋布

良

漁

布

滄洲

漁

高

良

布

椽先キに旅の腹いたいたはりて

下駄て手水の水汲に出る

はつ秋や龍田の祢宜の伊豫守

人にまきれて角力見る月

ひら／＼と捨る扇をけふの花

筑波のみねを吹おろす風

青々と土手一面に蘭を干て

母の病ひをなくさめに出来る

普門品かた言交り唱へつゝ

越後の高田町の長さよ

かけ声を覗ケは鏈を遣ふ也

はたちかしらに揃ふ前髪

青柳の梢さらりと雨晴て

春ゆたかなる米踏か門

かけらふに去年の布子を売替る

都みたさを人に隠して

ものすこき昆陽野、池の暮の月

秋をあはれに水鶏啼也

芭蕉葉に世を諷したる文を書

我醉郷に入レとすゝめる

壹貫の銭かしたれとなしもせず

股の根太トにいぬご踏出す

うつむきや又仰向つ坂の華

胡蝶の舞に蛇の笛吹

漁

洲

良

高

良

洲

南河

漁

河

布

漁

洲

良

高

漁

河

良

漁

河

良

洲

河

布

⑦ 「旅人の」の巻 半歌仙 (安永七年) (わ九九四・五〇・三・七)

二月十五日中寺町長行院興行



旅人のこゝろなつかしや春の雨

蝶ハ出そめし笠の梅かえ

眠る牛にもゆる陽炎昼過て

膳の流るゝ門トの溝川

寄合て顔つきつける軒の月

角力催しの米の高割

西の宮夏の漁から賑ひて

寺の普請の石車ひく

世に隠す阿闍梨の恋を唄に諷ひ

袴もにくや覗く若衆

画たる牡丹の花の青すたれ

奥ハはるかに雪の富士見る

脚気病人引起す月の暮

筏にのせて貰ふ秋風

三昧の空に雁啼さひしさよ

耆ケた犬を猿のとりまく

帰り路を花に忘れて夜を明し

蕨背負し人に連たつ

栲良

羅父

免湖

其龍

其白

青溪

茂松

淇舟

逸漁

夜光

父

良

龍

湖

溪

白

漁

松

人のさはりし椽の鶏頭

洗ふたる鍋やはかまに夕日さし

しくれの山にみゆる柴菊

撞初る鐘に鑄もの師立并ひ

娘を連レし婆々にあいさつ

かさしたる扇に隠す汗の顔

日和つゝきに桐の花さく

楊弓の音はかりする多武の峯

月代はやす人の引風

傾城に通詞中間の中間われ

海へ小袖を捨るうかれや

照月の情も花の散るこゝろ

鳥におとらし虫の声く

秋の野に兎の死骸をほり埋て

今津のふねに乗おくれけり

銭替に家を見立る駅のうち

雪のあかりに丁ちんを消ス

後手にひらりと隠すぬき刀ナ

恋のまよひに人を恨むか

夢の世とときし仏に妻もあり

風呂の湯流す夜の静さ

忘れたる鹽の鮎に雨もりて

目くらのくせに人遣ふ也

のみ喰もさせぬ夕部の窓の月

系図高ぶる盤若寺の秋

レンジヤクのとまりてハ啼銀杏の木

仰向に寐て来ぬ人を待

羅父

良

漁

河

良

高

河

良

父

河

良

洲

河

良

洲

漁

高

漁

良

河

洲

高

良

河

良

洲

良

⑧「はいかゝるや」の巻 歌仙（安永七年）（わ九九四・五〇・三・七）

二月十六日夜南河子興行

清火屋宗七亭にて

はいかゝるや酒に柳に夜の雨

指ヒ折る五六十の春

里うらの畑の中打半にて

鶴の居なじむ岡の朝月

秋の風卷たる駕の片すたれ

栲良

南河

滄洲

逸漁

洒高

高声にかなたの銭を呼びかけ  
てんかく匂ふ春の夕くれ  
駒とめてひそかに花を手折とる  
関の山みち霞わけ行

洲 良 河 漁

⑨ 「風の日や」の巻 歌仙 (安永七年) (わ九九四・五〇・三・七)

二月十七日村松藤太夫興行

前書略

風の日や花まつうちを松の宿  
梅ちる跡の軒のさひしき  
兄弟か蛤とりに連立て  
鏝たる鎌を腰にさしたり  
静なる里のはつれの朝月夜  
ぼうしをしぼる露艸の鉢  
秋涼し娘か着たるひとへもの  
大和の土佐の祭色めく  
鶯の声のほそりよ青あらし  
留守の庵に寐たほれて待  
蕎麦ねりの冷たを喰ふて寒ふ成  
底のぬけたる畚をそくくる  
から臼の場とりて狭き庭の隅  
雨の降夜ハ鳴の来て寐る  
御陵の月に泣らん艸枕  
虫歯いためし陀袋の栗  
船頭ハ咄しなからに棹さして  
早呉の国の鶏の声  
赤くくと日和さたまる山かつら

樗良  
素涛  
逸漁  
洒高  
素平  
蘿父  
丘高  
良  
漁  
高  
良  
平  
涛  
良  
漁  
高  
良  
漁  
父

人より先に若水を汲

正月に後家と馴染あらはれて

名古屋のうき名ミやれ春風

一軒の間口を飭る茶わん店

籠の兔を鳶にとられし

雇はれてけふもきのふも絹くはり

新し羽織襟おらす着て

久しやと縁とり敷て嫁に逢

酒吞たさに誉る硝子

水鶏啼雨の晴間の昼の月

藪を隔たるうらの禪寺

盗人としらすにとめて太鼓打

ひんと反りたる棒さひて居

鎧とも浅黄襦半をたのむらん

はや灯をとほす関の夕くれ

みちのくや烏の荒す花さかり

苗代時の人のいそかし

丘 平 父 漁 平 高 涛 高 漁 良 高 父 丘 平 良 漁 涛

⑩ 「かすむ日や」の巻 五十韻 (安永七年) (わ九九四・五〇・三・七)

二月十九日世義寺法楽舎興行 秋江饗応

前書略

かすむ日や翌の別のおもはるゝ  
鶯声を乱す遠里  
酒簾の軒にひらつく春風に  
具足着ながら舞ふて出たり  
円居して雑物燃す雪の上  
浪長閑なる寒の朝明

樗良  
秋江  
南河  
袋布  
逸漁  
洒高

入月に老たる鹿のさまよひて  
 行ききみえぬみなくの霧  
 秋の旅さひしくこゝろ幼さに  
 鏡にうつす眉のほそりや  
 ぬれ衣のうき名に局すへり来て  
 背戸からせどへ豆腐買るゝ  
 枇杷の花隣静かに鞍造り  
 矮鶏チヤボの自慢を人毎にいふ  
 ポイシンポイに古渡り更紗つき合セ  
 三里の道にほつと行つく  
 馬の子のちらゝ遊ふ秋の風  
 いせの太夫を送る夕月  
 賑かに初穂の稲をかさり持  
 花に嵐の市の最中  
 検校の御坊ひとりハ春めきて  
 金の扇や夜のかげらふ  
 涼しさを宮川町の琴の音  
 瘡おちたる娘つれ立  
 思ひつく深あみ笠の二腰や  
 硯筥かる茶屋の縁先  
 桶のうち柄杓おさへし菊の花  
 めくらの尼の月にてらるゝ  
 山科ハもの不自由なる秋の空  
 道のほれたる大雨の跡  
 鞆入に麻上下を着つれ立  
 朝日に光る恋の鬢髭  
 空眠りしたる憎さを覗くらん

良洲漁河洲良父高漁江漁良布蘭父漁良洲河高漁良素涛蘿父楚竹紫蘭女滄洲

屏風のこけて消る行燈  
 浜松の音静りて千とり啼  
 海士まつうちを流す釣舟  
 いらゝと背中にあつく日の返す  
 五月雨こゆる大豆の二ツ葉  
 時ゝは庄屋に酒をゆすられて  
 いつもかハラぬ中将某さす  
 ⑩ 泉水の橋をわたれば反歩タンボ也  
 鴛の来て寐る生柴の上  
 とやかくと廿日になりぬ冬のうち  
 きられし人をみなか剛かる  
 寄合ふて田の面の餅の賑かに  
 猫の子の啼鶏頭の中  
 法印の嶋のやかたに暮の月  
 黒崎とまり水風呂を問ふ  
 雨気つく花の夕の鐘たえて  
 すみれかもとに蝶とまるらん

高河魚涛父河高漁高洲良江涛良河涛江涛良河涛良布

⑪ 「雨降らば」の巻 半歌仙 (安永九年) (わ九九四・五〇・三・七)

八月十五日越後桃路子無為庵へ入来

船にて亭主す

雨降らは月又もれよ苦小舟  
 音をのみそなく遠近の虫  
 酒買に唐黍畑分行て  
 咎られつゝ興になりけり  
 狩衣の袖打払ふ雪の朝  
 流ハ見えず水の音する

越後市市  
 桃路  
 逸漁  
 良良  
 桂舟  
 楚竹  
 路

松風に飴売笛の声交り  
相図の人を隠れ居て待  
垣越に三井寺諷ふ恋こゝろ  
笹のあたりにふるゝ夕風  
矢を負し鳥の立行温泉の山  
道心語る道つれの尼  
出来合の間引菜汁に一夜とめ  
芭蕉を照らす庭の名月  
神主のかみさひ見ゆる秋の風  
ぬきたる髭を指に植けり  
打寄て芸くらへする花の陰  
雉子の背中にふせる盃

漁 良 舟 竹 路 漁 良 桂 竹 路 漁 良

(注)

- 1 この他樗良には連句に点をつけた連句評点資料がいくつか残存している。拙稿「三浦樗良の連句評点について(上)」『蒼穹』90号、平成20年6月、「同(下)」(同99号、平成22年3月)に紹介・翻刻した。
- 2 逸漁の俳歴については、拙稿「辻村逸漁年譜稿—安永期まで」(『研究と評論』65号、平成15年11月)参照。
- 3 福山順一氏「樗良と女性」『俳句研究』昭和12年7月号
- 4 以下、綿屋文庫の逸漁俳諧資料集(わ994-50)の資料を参照するときは、同資料集の下位番号を出典として「」に記す。
- 5 『頼原退蔵著作集』(中央公論社、昭和55年)、清水孝之氏『追跡 三浦樗良』(皇学館大学出版部、平成4年)参照。なお、清水氏は、樗良と逸漁に血縁関係のあることを推測している。
- 6 拙稿「安永期の暁台と伊勢俳壇—逸漁・樗良との関係を中心に—」(『国

- 7 古市駿一氏「大文字屋文庫—春帖・一枚摺など—」(『義仲寺』163、昭和55年8月)参照。
  - 8 拙稿「暁台連句資料の補遺と考察」(『金城学院大学論集』人文科学編12巻2号、平成28年3月)参照。
  - 9 頭注のかたちで、「田畦か」と記される。
- 「付記」本稿は科学研究費(基盤研究(C)課題番号:24520245)の助成による成果の一部である。また、綿屋文庫「逸漁文庫俳諧資料集」所収の樗良一座の連句について翻刻(該当冊子の部分翻刻)をご許可くださった天理大学附属天理図書館ならびに種々ご教示下さった中野沙恵氏に感謝申し上げます。